

総研 MRT1985年度現地討論会報告

1985年11月25日から27日にかけて、岐阜県下に分布する美濃帯中・古生界を対象にして現地討論会が行われた。寒さは厳しかったものの天気はまずまずで、有意義な現地討論となった。

25日午前9時30分、名古屋駅西口集合。広島から参加された方々にはやや厳しい集合時間であったが、全員遅れることなく集合。早速バスで第1の見学地である岐阜県各務原市鷺沼の木曾川右岸の露頭へと向かった。最初はジュラ紀中期前半の *Unuma echinatus* 群集の放散虫化石を含む頁岩、マンガンノジュールを見学。マンガンノジュール中には特に保存のよい放散虫化石が含まれるとあって、サンプリングに精を出す人の姿が見られたが、1983年9月の台風に伴う豪雨の際に露頭の大部分が土砂に埋もれてしま...

Mb 群集を含む頁岩そっくりの岩石が、ブロック状に含まれる所も新たに発見され議論をよんだ。この日の宿は下呂温泉。最上階に見晴らしのよい大浴場を持つ宿舎では、この日も夜遅くまで議論が戦わされた。三疊紀の上麻生チャートの堆積環境、馬瀬川のジュラ紀後期の頁岩の産状、佐野氏による舟伏山地域の地質の紹介などなど…。しかし、参加者全員の共通した関心の1つは、犬山、上麻生などで見られる繰り返しユニットの最下部にある三疊紀前期の珪質頁岩（いわゆるトラ石）の下には、いったい何があったのだろうかということのようだった。

最終日も快晴となり絶好の巡検日和である。路側に雪の積もった堀越峠を越え郡上八幡へと向かう。佐藤他(1985)により報告されたジュラ紀のアンモナイト

する。頁岩中には炭質物に富む部分が見られ、海を漂ってきた海藻ではないかななどの意見が出された。また、同じく頁岩中に見られる径20cmほどの石英斑岩の礫については、氷山説や木の根に挟まれて流れてきたなど諸説入り乱れての議論となった。いやはや漂流物の多い海である。昼食後、俗称“水谷露頭”を前に断層の形成過程、白亜紀(?)の日本の応力場などについて水谷教授が熱弁をふるう。その後、河岸を上流に向かって歩きながらチャートおよびチャート+砕屑岩の繰り返しを八尾先生の案内で見学する。最後にチャート層の下面部分のようすを見学し、ここは部分的に地層が逆転している(南上位)のではないかという意見が出された。この日の宿舎は入鹿池の湖畔に立つ静かな宿であったが、中ではその日の反省のあと、地質学会についてや、巡検で何を見、何を考え、そして今後何をすべきかなどホットな議論が夜遅くまで続いたそうである。

Keplerites の産地を見学し、あわよくば第2、第3のアンモナイトを発見せんがためである。しかし現地に着いてみると、露頭は長良川の流水の下となっており、一同(特に案内者の足立助教授)残念がることしきりである。アンモナイトはあきらめ、長良川を少し下った所でオリストストロームの露頭を観察する。犬山、上麻生が美濃帯の“美”の代表であるとすれば、こちらは“雑”の代表である。参加者は皆「どこでも同じだなあ。」という気持ちに浸りながらバスに戻った。昼食後バスは一路南下し、ほぼ予定通り名古屋駅に到着した。

最後に、案内者の準備不足、勉強不足の巡検であったにもかかわらず、熱心に議論し御批判下さった参加者の皆様、巡検の機会を与えて下さった市川先生に、案内者を代表して感謝いたします。

(小嶋 智)

現地討論会参加者